

折伏とは何か

廣田 頼道

私が京都の平安寺へ在勤したのは、昭和四十四年、四十五年の二年間だったと思う。

その後、立正大学へ行く都合上、池袋の法道院へ四十六年から五十年迄在勤した。

京都の平安寺へ在勤した頃は、さすがに創価学会の折伏大行進は下火になってはいたがまだその名残り（体質）があった。

私は、定時制高校へ通学して、昼間は、法事、葬式、御授戒、結婚式と、その日その日の法務という名前のついた仕事をこなして行くのが日課だった。

その生活の中で、信仰者として僧侶としての信念とか精神的な点を折々に触れ、折々に教えてくれることはほとんどなく、仕事を手際良くさばき、信者さんの対応をどの様にするかという、ノウハウがほとんどであり、そのことが出来ること、僧侶として一人前の仕事が出来るとい証しという感覚だった。創価学会が指導し、寺院は典礼部という分業制

であれば、僧侶が指導力を持つことは無意味なことであり、指導のくい違いは活動の停滞を招き、トラブルの原因になる。ましてや、宗門の教学部長、総監の寺院で、そういったトラブルが発生したら、面目丸つぶれになる為、私達に勤者も、創価学会員に深入りしない様な空気を察知して、そういう自分を作って行くわけである。

私の体験は平安寺で夜に起ったことだから学校の無い忙しい日曜日のことだったと思う。

夜の十二時を過ぎた頃、玄関の大きな一枚ガラスの扉をたたき、太鼓の様な異様な低い音が響いた。たしか夜の七時が最後の御授戒で、その御授戒が終り次第、本堂の点検をして、道路に面した門扉を締め一日が終りとなっていたと思う。（どの御寺も同じ様なものだと思う）

ガラスをたたいているということは、道路に面している身の丈以上の門扉を乗り越えて来たということになる。

何か大変なことが起きたのではないかと思ひ、私が最後の受付番だった関係で受付へ走って電気を付けた。

すると、三人か四人の男の人達が、ほっとした感じの顔をして笑っている。

「どうしたんですか、今日は終わったんですけど」

というと、

「御授戒御願いします。今日じゅうにしないといけませんです。」

「今日はもうこんな時間で遅いですので、明日来てくれませんか」

「住本寺でもことわられて、やっとの思いでこっちに来たんですよ、今迄折伏して来たんですよ。私達は広宣流布の為折伏して来たんですよ。遊んでいたんじゃないんですよ。」

「ですから明日の朝の勤行の時でもいいですから………」

「本人の気が変わったらどうするんですか、責任取ってくれるんですか。私達は仏法の為折伏して来たんですよ。あなた方の様に遊んでいるんじゃないんですよ。」

ムツとした、喧嘩はいけない。自分の一存で結論を出してはまずいと思い、住職にこの創価学会員を説得して断ってもらおうと思い、奥へ行って事情を話

すと、

「仕方ないなあ——やってくれ。」

それだけの言葉だった。自分がやるという言葉も無い——空しかった。

「あなた方の様に遊んでいたんじゃない。折伏して来たんだ。」

一日で本人の気が変わるかもしれないという脅しの言葉。

夜の十二時過ぎの夜討の様な御授戒。

御経を唱え、御授戒をする間じゅう釈然としない異様な思いが心に巡る。御本尊様に取次ぐ等という信仰の精神状態にはついぞなれないまま、心ないめくら判の様な形式で終わった。

終ってニコニコして、一応の感謝の言葉を言って帰る創価学会員。

懇懃に

「御苦労様でした。気を付けて御帰り下さい。おやすみなさい。」

と発言したが、これが本当の折伏なのか、御授戒なのかという思いが、今でも澱の様に自分の心に沈んでいて、時折頭の中に蘇って来て、心をジクジクと

つきさすのであります。

実は、ジクジクとつきさす澱の様なものはこれだけではありません。

夜の御授戒の勤行をしている時に、どうも後ろに気配がないなあと思つたけれども、勤行中に振り返るわけにもいかないので、そのまま御経をあげていたら、受付の者がポンポンと肩をたたき、「アレッ」と思つて見ると、本人も紹介者も消えていなくなつている。私だけが御経をあげている。本人が逃げたので紹介者も逃げたようだというのであります。

私は、実家は元々創価学会を縁にして、この日蓮大聖人様の仏法に縁したわけですから、創価学会総体に憎しみや恨みの感情は持つていかなかった。しかし、創価学会の中には極端に走る偏執な人がいるという認識は、たくさんの創価学会員と接する中で感じていた。そして、そういう人達を産み出す土壤があるということも分つていた。

法道院へ在勤した時も、福山の正教寺へ在勤した時も、御経が終つて御授戒をする為にふり返つて、「一番前へ出て下さい」というと、

「……………」

紹介者が、〇〇さんと促しても、背中を押しても、前に出てこようとしない。柱にしがみついて、紹介者その指を一本一本はずし、はずした後からまた柱に指がからみついて行く人もいた。

「あなたは自分の意志でこの場所に来て、自分でこの信心をするといつたんですね。」

「はい」

「じゃあ、私ここから降りて行きます。」

と言つて御授戒本尊を持つて、その人の所へ行き、かたくなにそこに座っている人の正面に座つて、頭に御本尊を頂かしたことがある。柱にしがみついている人の所迄行つて御授戒をしたわけでありませう。

この時も、折伏して来た人の心に報いてあげなければという気持と共に、ここまでして何の折伏なんだろう、何の御授戒なんだろうと思つた。

又、御授戒を受ける人が御経に遅れて来ると、最後の題目三唱に間に合えば御授戒を受けさせてしまふという御授戒も随分行つて来た。走つて御寺へかけこんで来て、御授戒が終つたと言つて五分位で帰つて行く。入信の出發に際し、御経を唱えることもない。

私は今でも、そういう場面に関わって来た一人の背信者として、澱というより毒と言える、いつまでたっても、消えることも、薄くなることも、分解することも無い物がひっかかっているのです。

僧侶はいつの時代も正しい、前から間違いに気付いていた等という人がいるが、私は言えない。正信覚醒運動の道を選んだのも、こういつた事への反省心しかないのであります。

本当の折伏とはどういう折伏なのだろうか。

少なくとも前にあげた事柄は折伏では無いと言えよう。

御寺へ来る。御授戒を受ける本人に、初めて御経本、御数珠を紹介者がプレゼントと言って買う。へたをすると御本尊下附の御供養まで紹介者が包む。

初めて御経本を見て、初めて数珠を手にし、初めて御寺へ来て、初めて僧侶を見て、初めて御経を聞き、初めて題目を唱えなさいといわれて唱えてみる。

そして、御本尊を自宅へ持ち帰ってから、謗法払いをし、どこに御本尊を御安置するかを考え、ワイシヤ

ツかりんごの箱かなんかに白い紙をはって、御本尊様を御安置して、信心がはじまるといふより、学会活動がはじまる。常に気が変らないようにという不信の思いと戦い乍、ここまでもって来るのがほとんどの折伏といわれるものであります。

御本尊様に「今身より佛身に至る迄……」と誓った心が、御授戒が終った瞬間に、創価学会入会の為の御授戒にすり変って「今身より人間革命する迄は、組織の為、幹部の為、池田先生の為に……」になつてしまつています。(現に、御授戒の後、本堂の隅で、「これから信心して行く上で、この御寺へこなくて良いんだからね」と言っていることを聞いたことがある。)

選挙活動、聖教新聞啓蒙、購読、特別財務要員へと育つて行くわけであります。

●自分達の創価学会の指導者(池田大作)は完全者であり、組織も完全である。信仰している者は正義であり完全であり、自分達は世直しする使命を担う者である。逆に、世の中の信仰していない者(創価学会員でない者)は不完全者であり、謗法者、あわれな罪人で、自分達創価学会員は彼等を救つてあげ

なければいけない。

●どんな折伏であろうと、創価学会員は良いことをしているのだから、ゆるされるのである。発心真実ならざるも、功德があつて当然である。創価学会の邪魔をする者は、謗法者であり邪宗であり害毒である。

●世界を自分達の立てた理屈、主張が自由自在に通る世界（仏国土イコール創価王国という発想）を築く為に自分達は信心活動（創価学会活動）をやっているんだ。その為に選挙は法戦であり、その為に一票を依頼する際に土下座をしようが、身替り投票をしようが創価学会活動が選挙活動そのものになろうが法律や、社会の常識やルールを無視しても、仏法（創価学入）の方が大切だから、社会的に罪があつても、仏法の上では功德になる。

●創価学会しか見えない、考えない。創価学会の御陰で、池田先生のおかげでという偏狭さ、ブロイラー鶏のゲージの様な環境の中で、洗脳されていると思わない様に自分の心を殺させ、集団思考的軍隊の様に洗脳され、そこに喜びを感じる人間になる。

●創価幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と他の

思想、哲学、価値観、目的観、人生観に一次的に触れることなく純粹培養され、創価学会の価値観しか分らない者をエリートとし指導者とする。

大石寺も東京渋谷に「法敬院」などという一般大に行かせないで、大石寺法門を教える学校を運営しているが。そこで大石寺の主張だけを詰め込んでみた所で、一般世間の人々に仏法を伝えて行くことからはどんどん遊離し、閉鎖、独善、偏見、孤立を深めて行くだけなのであります。「貫首本仏」「戒壇絶対」を徹底して教え込み、一般世間の人々が、何を考え、生活しているのかも触れないで、どうするというのが。創価学会と同じ思考回路ではないか。

●入信しなければ従業員として働いて貰うことを考えなければならぬ。仕事上の取引を考えなければならぬ。三ヶ月以内に事故や病気に見舞われ死ぬかもしれない。

女子部が人ごみの中で「良い所へ行きますか」と声をかけ折伏会場へ連れて行き入信させる。こういった脅し、賺し、甘言を臆して折伏の成果をあげて来たのである。そういう入信の仕方であつてもたくさん信心している人々がいるではないかと主張す

るだろう。たしかに御経を読み御題目を唱えていても、日蓮大聖人の本因妙の仏法には縁していない。下種されていなかったのであります。

●会員を組織し、政治団体を持ち、政治権力を行使し、自分達で思想で社会をコントロールし制圧し（創価王国思想）て行くことが広宣流布と考えている、日蓮大聖人の教えに存在しない間違った考え方。●御本尊を持っていれば良いことがある。やめれば罰が当る。入信して何年たっても現世利益の信仰観と折伏観。治し難い病根になってしまっているのがあります。

日本エッセイスト・クラブ編

95年版ベスト・エッセイ集

「お父つつあんの冒険」 文春文庫

の中の「百人分の巻きずし」（九十七P）の所を何気なく読んでいた時、私は創価学会のこういう考え方は、もう治し難いと思いました。英国在住のハウスキーパーをされている高尾慶子さんの文章ですが、この方がパーティーの手伝いに行った場面で、その家の主人のヘンリーさんとの会話で

「私はソーカガツカイの会員です。ケイコは？」と

尋ねられたので、「カトリックです」と答えた。この所英国で創価学会は着実にゲイの会員を増やしていた。「ナンミヨーホールンゲーキヨー」と大声で唱えれば、エイズにかからない、もしエイズにかかっても日蓮聖人がたちまち治癒して下さい、というのが学会の信者集めのうたい文句だ。検査の結果、ポジティブと宣告されたゲイたちは、薬をも掴む思いで、何にでもすがりたい。彼もその一人だった。

「富士の大石寺へは二度行きました。私は日本人が好きです」とも言った。――

以上八点の●を挙げましたが、もちろん●は、悪いサンプルとして私達が見て来た創価学会の姿をそのままあげました。今は創価学会は随分昔と違って良くなったという人がいますが、十年一日、創価学会の体質は、変らぬ指導者と同様変れないのであります。

○折伏は時間をかけなければ出来ない、一晩で熱病の様に入信させても、してもいけない。

○折伏とは御授戒を受けさせる、御本尊を安置させることではなく、自分の仏性に目覚めさせることで

あります。

○入信する迄に、日蓮大聖人の人生、御本尊、読む御経、題目の意味等々の概略を聞き、題目をいっしょに唱えてみる。手を合せてみる。御寺に参詣し自分の考えを示し、僧侶の話を聞いてみる。全体的な参詣日に参詣し、個人的、全体的に話ぐくい違ふことがないか、指導者として得る物があるか良く聞いてみる。自分がこれからやって行こうとする信心がどういうものか自分自身で知る。

○入信し御授戒を受ける際に、自分の意志で判断決断する。

○入信する時は、伴侶や家族に、こういう内容の信心をしたいと伝え、たとえ徹底した反対があつても秘密やだまして御本尊を持つことはいけない。持つていけば良いことがある。やめれば罰があたるという精神的強迫を絶対にしてはならないし、個人の折伏のノルマ、成果、組織の成果の為の折伏、折伏する者の幸福（創価学会式功德欲しさ）追求の為の折伏は折伏ではない。そのような手段の為に入信することは入信ではない。

何十年も御本尊を巻きっぱなしでタンスの奥に入

れているという状態はあつてはならないことである。家族の反対があれば、内得信仰で、朝晩決めた場所
で胸を張って勤行し、家族に信仰の姿を示して行く。決して信仰をかくしてはいけない。信仰、折伏の第一歩は自分が日蓮大聖人の仏法を信仰していることをさらして行くことであります。

○人に折伏する時、後輩に接する時、信心している自分は完全者で、あなたは不完全者、劣った人間。組織は完全、御寺は完全、住職完全、先輩完全ではなく、一切衆生皆んな凡夫として、迷い、弱さ、怠け心、いやしさ等々を持っている。持っているけれども一切諸法の要である妙法を想い出して想い出して、貫き通す勇氣を持って、そういう凡夫だけれども、御互いに戒め合い、導き合つて精進して行きましよう。私の方が縁あつて早く入信しただけです。信心の年数や、僧侶だ信者だ、役員だの肩書で上下があるのではなく、皆んな平等、皆んな凡夫、皆んな成仏出来るという教えの信心です。ただ信仰者の中に役割立場が協力仕合う為にあり、その責任を果して行くか否かだけです。誰も完全者、絶対者、生き仏などいないというのが日蓮大聖人の示された仏

法です。

○いつでも、どこでも、誰にでも、袖振り合うも多生の縁の旅先で、人生の中で一回だけの隣り合せでも、本因妙の仏法を伝えることの出来る。信ずる喜び、修行する喜び、折伏する喜びを持った信心をして下さい。あなたも仏ですよ。あなたも仏ですよ。むつかしい教理をマスターしなくても、信ずる喜びを伝えることが折伏であり仏種であります。

○自分の己心の折伏こそが本当の折伏だから、自分はまだまだ己心の折伏が出来ていないから、他人に折伏するなどおこがましくて恐れ多くて出来ません。折伏なんかしっちゃあいけません。という人がいます。が、己心の折伏は死ぬまで続き終りはありません。じゃあいつになったら、折伏出来る人格形成が完成するのでしょうか。出来ません。一切衆生は全て凡夫であることが前提の日蓮大聖人の信心です。凡夫は瞬間瞬間に妙法と一箇になって行くことによって仏であり、固定化した仏（完全者）にはなれないのであります。悟ったり迷ったり悟ったり迷ったり、氣付いたり忘れたり、氣付いたり忘れたりの不完全なまま、この本因妙の仏法を信じ行ずる

喜びを、自分の等身大の器のまま、伝えることが、本因妙の折伏なのであります。己心の折伏が大切だから、他人を折伏出来ないというのは屁理屈であり、逃げ口上であります。

「随力弘通」

の聖戒に外れるものであります。

○今迄の信心は組織信仰、所属信仰でありました。創価学会に所属しているか、大石寺に所属しているか、正信会に所属しているか。所属していれば、何を考えていようが正しくて、所属していなければ、誹法——という判断を下してやって来たのであります。しかし信心は、その人が心をどこに決定させているかという心の問題であります。勤行しなくても誹法していても、所属さえしていれば信仰者として認めるといふのは本当の信心ではないのであります。

所属しているだけでその組織は安心し、自分達の力を世帯数や動員数で誇示しようとする、数こそ正義の論法を振り廻すだけなのであります。

たしかに所属は心の置き所を確認する重要な条件かもしれませんが、しかし団体で成仏するわけがなく、

徹頭徹尾一人一人の自己責任のもとに信仰はされるものなのであります。

Aという寺に所属して、A寺の住職が手続きの師匠だから住職の言うことだけを聞いている、他の話など聞く必要がない。——ということになれば、寺の所属こそが信心の根本で、日蓮大聖人の仏法は二の次、三の次のことであり、住職は仏と同じ完全者だということになってしまふのであります。完全者を装っている池田大作を離れて、同じ完全者ぶっている阿部日顕に変わる。俺の言うことを聞かない者は成仏しないぞとにらみつける住職に変わる。人物が変わるだけで主張していることが同じであれば、成仏の邪魔をし、信心を歪めているだけの者でしかないのであります。手続の師とは日蓮大聖人並に仏法に導き手を継ぐことをしてこそ手続の師なのであります。

所属信仰、カリスマ信仰は、日蓮大聖人の説く所の信仰、凡夫個々の自立した成仏を説いた信心ではないのであります。

○御本尊を持ってさえいれば。御授戒を生まれればかりの時にでもしてさえいれば、現在どういう考え

でも信仰者として認めるといふ考え方がありません。

法事の申し込みがあれば、信者さんが創価学会員であることが容易に想像出来て分つていても、御本尊が日顕師のものか日達上人か日寛上人のものか確認もせず出掛けて行って、日顕師の本尊であれば法事の時だけ懸け換えて、御経を唱え、また懸け換えて帰ってくる。当然、法事の前後に喪主に対して、そうする理由や、今後の為に御寺に来て下さいとか、事前に確認しなければならぬことを現場でバタバタと付け焼き刃で言うでしょうが、法事さえしてもらえれば良いと思っている人間は、それ切り連絡すること、真剣に考えることもないでしょう。

その人の家に御本尊を御安置していない状態でも、過去に御授戒を受けています。家に御本尊がないから御寺で法事をして下さいと言えば、それを行うのか、四十九日納骨が終って法燈相續する気持がないと分つていても、自分が断われれば謗法の寺院で法事をするのが眼に見えているからと言って法事を受ける僧侶がいる。私はいけないことだと理解し断る。これからの時代、こういうケースは増えると思う

が、どこまでを信仰者と認め、どこまでを認めないのか、不受不施の誹法の、施しを受けないという厳正な仏法上の節度を今日の社会事情を検討し定め、仏法を貫くべきであろう。断ることも折伏であり、日蓮正宗の教えとはこうですと伝えることが折伏であるという観点が僧職にある者の優柔さで揺らいでいると思う。

○Aさんを三年、五年と折伏して来たが、Aさんはどうしても先祖からの宗派、親戚等のしがらみを断ち切って御授戒を受け入信することが出来ない。しかしAさんの心中は、自分の家に伝わる信心に生命を委ねる気持も給仕する気持も無い。自分が入信を決断すれば、離婚し出奔しなければならない可能性が大きい。そこまで現状を変え、自分個人の問題として処理する勇氣がない為に入信することが出来ない。日蓮大聖人の仏法を折伏される中で、本当の信仰とは、日蓮大聖人の生き方であり、説く所の教えこそが本当の成仏の道であろうことが納得出来る。自分の家に伝わる宗派の間違いも分る。自分自身の勇氣のなさで入信は出来ないが、心には南無妙法蓮華經の題目を大切に持って行きたい。そして信仰に

迷っている人がいたら、日蓮大聖人の信心でなければいけないことをすすめたいと思う。一切のしがらみがなくなったら、私は日蓮大聖人の信心をしたい。誹法の神社仏閣にも行く気はない、誹法の宗派の中にいても、一つでも誹法を重ねない様に生きて行きたい。

私達が現世利益を前面に出した折伏でなくまじめに法華經の行者とは何か、日蓮大聖人の生き方はどうだったのかということを大切に折伏して行った時に、必ずこうした考えを持たれる人が世の中に多く存在して来るはずであります。

所属信仰でない。所属出来ない信仰。しかし、心の底で日蓮大聖人の仏法に救いを求め、我々に矛盾なくこの仏法を守り貫いて行ってもらいたいと念じている、社会に潜在する人間の存在を、社会の中に築いて行くことが折伏だと思っております。

入信したら順縁、入信しない人は逆縁などという判断はまったくナンセンスであります。私達は皆んな逆縁の衆生であって、悟ったり迷ったり悟ったり迷ったり繰り返して、固定的な仏界の生命を持つことの出来ない衆生なのであります。

所属を以て入信。所属を以て弟子。所属を以て正しいではなく、仏種に目覚めるこそが折伏なのであります。

○創価学会では、相手に絶対負けてはいけない。捨てぜりふでも「信心で勝負しよう。」「三年以内に現証が出る。」「事故に合うぞ」「可哀相に……」相手を不安感に落とし入れ、精神を呪縛してしまう手法を使うのであります。脅しで人を救うことは出来ないであります。

折伏に行つて、自分の分らないことに突き当たつた時、創価学会員の様に、負けてはいけないという意地や面子で怨念や間違つたことを言うのではなく、相手に馬鹿にされようが、言葉に詰つたら、「じゃあ、このことを今度合う時迄に勉強して来るよ。」「この間のこと分つたよ、こういうことだよ。」自分が日蓮大聖人の教えを100%知っているものでもないし、看板を一人で背負っている訳でもないのですから、昔の様に公場対決で生命をかけて——ではなく、話し合い、文書、論文、手紙のやり取りを通じて、第三者が見ても、何がそこに語られ主張されているのか分る形、時代を超えて人々に伝わる形

で、折伏法論がすすめられて行かなければならないこれからの時代状況だと思ふ。

日蓮正宗の何代目かの貫首が、法論に際して、自我偈を逆から読んで、「この御経はどこにある」と言つたら、相手が答えられず法論に勝つた——。こんな話を後世に語り継がれても何の意味も内容もなく、勝つたことにはならないのであります。勝ち負けでなく、一切衆生成仏の為、真実を明らかにする意味ある内容が必要なのであります。

勝つたと見えても意味の無い事。負けたと見えても意味のあることが世の中にはたくさんあるのであります。

小樽問答で創価学会が身延にある日蓮大聖人の骨と主張しているものは大きすぎるから馬の骨だろうと言つたら相手が青くなつて絶句した。——という話も、勝つたことでもないし、まったく意味内容の無い法論でもなんでもないのであります。たしかに潔い人は時代と共に無くなっています。しかし、法論に負けたら寺を出て改宗し、あなたの弟子になる。と、誓状を立てた所で、本人の心の底からの信念から出たものでなければ、その人の仏種

を開いた、折伏法論ということにならないのであります。本人が心の底から信仰を選び、菩提心を起こさないかぎり意味がないのであります。

折伏は個人や組織の決闘ではないのであります。

今日の世界各地に起っている民族間のぶつかり合いを見る時、強制されたもの、権力や殺戮によって服従させられ押し着せられたもの、それらは、五十年経過しても千年経過しても納得出来ない憎しみを呼び起しているのであります。日蓮大聖人の教えがどれほど正しくても、脅し、賤し、甘言、強制、殺戮を持って折伏と称したとしても逆に仏法から離れ仏法に憎しみを抱く人々を輩出し、仏性の扉をかたく閉じさせることなのであります。

○折伏は情報開示である。

前に、信心折伏の第一の前提は、自分が日蓮大聖人の信心をしていることをかくさない、恥かしいと思わず他に示して行くことだと申し上げました。

九八年五月三十日付読売新聞の宗教に関するアンケートを見ると、

その宗教団体が何を活動しているか分らないというのが一位で39%もあります。つまり胡散臭いとい

うことなのであります。

私が正教寺で信心修行することは信仰の道から外れることだと思ひ出したのは昭和五十六年八月三十一日のことでした。川口町という所に四年間いて、昭和六十年十月二十一日に今の千田町へ移転しました。移転して二、三日たった時、御寺の下の道路を掃除している時に、中年の二人づれの御婦人の方が掃除している私の横を通り乍、御寺の看板（当時、日蓮正宗福山布教所）を見上げて、

「はああ、ここは創価学会の寺になったんだねえ」と言つて過ぎて行つたのです。

私はガア——ンと槌で脳天から杭の様に打たれて地面にズンツと入つた様な暗い気持ちになりました。

私も信者さんも日蓮大聖人の仏法から外れる創価学会の邪悪な方向に決別したい、自分達も加害者であつたことを反省して、本当の日蓮大聖人の弟子といえる様な仏道修行をして行きたいと思つて布教所を開いたのに、それが創価学会の寺。日蓮正宗は創価学会僧侶部という一般常識になつてしまつていて、そういうことを思い知らされたのであります。

それで私はまず、この御寺が何を主張している寺

創価学会は信仰を悪用するな
選挙活動は信仰ではない

かということを少なくともここを通る人に伝えなくてはならないと思い、辻説法をすることと同様の気持に立って看板を出すことにしました。前の川口町にいる時から、

上記の看板を出していましたので、改めてこの土地においても看板屋さんに頼んで通りに向けて出そうと思いました。しかしふと、私達は創価学会員の為だけに信心修行をしているのではないのだから、一般の人々にも、私達が何を主張し訴えているのか伝えなくてはならないと思い、何日も考えて箇条書きにして

○戒名を御金で売り買いするような信心ならやめなさい。

○御金の大小で読む御経を変えるような信心ならやめなさい。

○御金の大小で葬儀や法事に着てくる衣の色が違ふような信心ならやめなさい。

○御金がもうかる、病気がなおる等々の欲のか

らんだ拝み屋の信心ならやめなさい。

○自分の宗旨ではない御経（般若心経等）を写経し、それを信仰修行とするような信心はやめなさい。

○精神統一のためといって坐禅を組ませるような愚かな行為はやめなさい。

○何宗でも、どんな教えでも、皆んなが仲良くすれば良いという信心ならやめなさい。

○御葬式に僧侶が何人もくるからありがたいなどという信心ならやめなさい。

○子供が喜ぶから、皆んなが喜ぶからで何を拜んでいるのかもどんな教えかもわからない神社の御祭り、みこしかつぎなどはやめなさい。

○成仏出来ない信心はやめなさい。

一般世間の人々のまちがった宗教観にも指摘を加える折伏をしなければいけないと思つてこの看板を掲げた。

次に、日蓮大聖人の四箇の格言を改めて社会に伝え示さなければいけないと考え、この御金言を掲げた、今日、日蓮大聖人の信心をしている者でも、四

阿弥陀仏は無間の業

禅宗は天魔の所為

真言は亡国の悪法

律宗・持斎等は国賊なり

秋元御書（一〇七三頁）

箇の格言は世間に誤

解を与えるといつて

敬遠する人々や、は

たして日蓮大聖人が

四箇の格言を言った

だろうかと言う人も

勤行

朝夕六時

丑寅勤行うしとら

毎月一日、七日、十三日、十五日

早朝二時二十分より四時迄

法要と説法

毎月一日、十三日、十九日一時と七時より

自由に御参詣下さい。

宗教に関する相談何でも御聞き下さい。

いる。もちろん四箇の格言だけの言いっぱなしは折伏にはならない、しかし何故この様に言わなければならなかったのかを今日の我々が伝えていかなければいけない責任と義務があると思う。その意味で四箇の格言は出発と考えなければいけない。本堂で、このことを分って入信した人々に大声で説法している場合でなく、世間の念仏宗、禅宗、真言宗、律宗の人々に対してこそ言わなければいけないことだと思ふ。次に、この寺が何をやっているのかということ世間に伝える為に、自由に参詣して下さいという姿勢を表明しなければいけない。こちらが心を開くことによってあちらも心を開いてくれると思ひ、この看板を掲げた。合計五枚の看板は、創価学会員へ、一般の世間に対する問題提議、日蓮大聖人の指摘、この御寺の住職と参詣されている御信者がここ

で何をしているのかということ、基本的初歩的にこのことだけは態度表明として伝えなければいけないはずだと思った。その上で、「創価学会の御寺が出来たんだねえ。」という人がいても、それはこちら側の問題ではないと思つた。この五枚の看板に加えて、N T Tの黄色のタウンページに意見広告を出した。

電話帳の広告を他を批難、批判したり、自分しか正統はいないというような表示は断られるので、これ位の表現しか出来なかった。これ等の何が媒体になつたか、わざわざ聞かないから分らないけれども

仏になる道は法華經に及ぶ經なしと云う事は正しき仏の金言なり

〔法華初心成仏抄〕全集五四五頁

信仰してもしてなくても、生、老、病、死の苦しみは必ず起ります。信仰すれば病氣にならないとか、死なないということはありません。仏法はこれ等をさけて逃げるのではなく、正面から受けとめ、法に身をまかせ、尊厳を持って生きる勇氣と成仏の道を示しています。ですから、信仰は老人になつて、ひまが出来たらするというのは間違ひです。仏法は死を説いているのでなく、心と生き方を示すものであります。若く、忙しい人ほど、自分の生き方をみつめ、自分の本来の尊さを見失わない為真実の法が必要なのであります。故に、葬式、法事、加持、祈祷、水子供養、金もうけ、方位、運轉、厄よけ、病氣なおしの為の仏法ではありません。葬式仏教として、戒名料等請求し、他宗派の葬式、法事でも同席して読経する僧侶の無節操、人の不安をおおる強引な布教も、政治権力にすり寄り利権を求めめることも、全て宗教の悪用であります。正しい信仰と正しい生き方をする為の御質問御相談に御答え致します。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

朝夕勤行六時 丑寅勤行 毎月1日・7日・13日・15日 2時20分より4時迄
毎月1日・13日・19日 13時と19時より 法要と説法(参詣自由)

日蓮正宗 三寶院 住職 廣田頼道

〒720-0014 福山市千田町敷路423

(F 兼) (0849) 5515603

まうものもあります。しかし今日の世間の常識になつてしまつてゐる葬式仏教の悪しき認識も烙印も、私達は話して改めて行かなければいけない責任がある

一年間に二十件ほどの電話や直接尋ねられて来る方がある。中には信心の話にも入れない。家庭の悩みや人生相談、いじめや、職場、人間関係の相談で終始してし

と、話を聞き乍痛切に感じるのであります。本当に正しい法を求め、救いを求めている人々がいるのであります。私達が努力を怠つていたのであります。

結び

日蓮大聖人は常不輕菩薩の跡を継ぐ者であるということを自ら表明しています。

常不輕菩薩は

我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏

我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べしと。

この二十四文字の經文を日蓮大聖人は、日蓮が唱える南無妙法蓮華經の題目と同じであると示されるのであります。

この二十四文字には大きく二つのことが主張されています。所以者何の前と後の二つであり前半は、絶対の平等。それも、自分を底下のどうしようもない凡夫であるとの深い自覚を持って、相手をさげす

むことしない、出来ないという心と、後半は、その絶対の平等の根源とは、皆南無妙法蓮華經の菩薩の道を行ずることによって、誰もが成仏出来るのであるという、一切衆生成仏を証しているのであります。私は、方便品読誦の意味にあげられる、仏と衆生の絶対平等の教えと、寿命品読誦の意味にあげられる、仏も衆生もその本源は南無妙法蓮華經であり仏であるとの教えがこの二十四文字の經文に凝縮しているからこそ、日蓮大聖人は、日蓮が唱える題目と同じであると示されていると思うのであります。つまり南無妙法蓮華經はその心を包含しているのであります。

常不輕菩薩品第二十の二十四文字の御經を略して、二十四文字の經文の示された後の所には、

我不敢輕於汝等。汝等皆当作仏故。

我敢えて汝等を輕しめず。汝等皆、当に作仏すべきが故に。

と十四文字に凝縮して經文の主旨を鮮明に出しています。

日蓮正宗は、口では盛んに、常不輕菩薩の跡を継承するんだということを主張します。しかし實際の

體質はどうでしょうか。

最初の方に創価学会の悪しき體質、折伏のあり方を述べて来ました。しかし日蓮正宗の馬鹿馬鹿しい年功序列で仏法が守られ弘通出来ると思ひ込んでいた體質。創価学会が軍隊式になって行っても、それを戒め、善導し、本当はこうなんだと手本を示すことも出来なかつた日蓮正宗の姿はどうなんでしょうか。

まったく常不輕菩薩の姿が生かされていないのであります。

眞の折伏のあり方は、折伏だけを論じても論じられるものではありません。本尊觀、血脈觀等の、何を折伏し伝えるかの仏法の本源となるものが明確でなければ、ただの統制運動、マスゲーム、洗脳運動であり、覇権主義侵略主義でしかないのであります。

正しい法によって侵略され、正しい法に洗脳されるのだから、当初は苦しくても、結局の所、喜び、感謝する人間になると考え、創価学会は行動して来ました。日蓮正宗も追従し容認して来ました。池田大作に取って替つた阿部日頭（本名阿部信雄）師も、創価学会の思想そのままの考え方で正しいと思ひ込

んでいます。

もう一度常不輕菩薩の經文に立ち帰って考えてみると、

我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。

と説かれていることは、相手がどの様な考え方をしようが、どの様な生き方をしようが、その人の仏性を信じ尊重します。決して今だけの眼に写る姿をとって、自分の方が上だとかさげすんだりとかしません。信心をしていないから邪宗だとか宿業が重いついか、可哀相な奴だとかということを感じることは間違いであるわけでありませう。そして

汝等皆菩薩の道を行じて

ということとは、強制や、持っているだけで功德がある。返せば罰が当るといふのではなく、その人間自身の決断によって行ずることが菩薩の道を行ずることであり、行じさせるといふことではないのであります。その本人が自主的に信じ行ずることを、正法を伝え乍ら待つことが折伏なのであります。

これからのことを考えると、日蓮正宗も創価学会も、天に唾する様に、いつの頃から狂って来たのか分りませんが、微塵も、「常不輕菩薩の二十四文字

の經文」の心の存在しない、他を否定し、制圧し、覇権し、満足している狂暴な刃物を振り廻しているだけの狂人の主張する折伏鬼になりはててしまっているのであります。

今こそ、常不輕菩薩の心に根付いた、日蓮大聖人の目指した、どんなに反対され、ののしられ様が、その者を善知識、方人（かたうど）と理解し、その人自身の意志によって、心から南無妙法蓮華經の正法を信じ、仏性を信じ聞くことを見守り待つこと出来る、本来の折伏を蘇らせなければいけないと思ひます。

崇峻天皇御書（全一一七四P）

一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、不輕菩薩の人を敬いしはいかなる事ぞ教主積尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ

の御金言を拝する時、強制、強要、独善、社会権力構築は折伏でないであります。完全者ぶらず、凡夫の弱さ、迷い、誤ちをあるがままにさらけ出し乍ら、それでも妙法によって救われ、我も仏、君も仏となれることを説きつづけて行く大切さを示してい

ることに気付くのであります。

この御金言は、

教主積尊の出世の本懐は人の振舞にて候ける所の所ばかりに焦点があたっています。この前半の不軽菩薩を中心にした指摘こそが、中心となる重要な点であり、

教主積尊の出世の本懐………

はその補足的説明なのであります。

日蓮大聖人の教えは、末法の衆生は無智である。

だから機に叶う叶わない、教えの好き嫌いに関わらず強いて南無妙法蓮華経を説き聞かせなくてはならない、強折をすべし、という教えであります。しかし強折とは無理矢理に入信させるということではなく、不軽菩薩の様に、いつでも、どこでも、誰にでも説き続け、縁を結び続け難を忍ぶ強折なのであります。創価学会も大石寺も、この点を多大な錯誤を持って日蓮大聖人の法門と誤っているのであります。